

# 附編 1 篠向城下における「町」の形成と推移をたどる —主に近世・近代の文献史料を手がかりに—

森 俊弘（真庭市教育委員会）

## はじめに

本稿は表題のとおり、篠向城下にみられる歴史的な特徴について、具体的には城下に見いだされる「町」の形成とその推移をたどることを目的とするものである。検討にあたっては、主に文献史料に依拠して進めることになるが、その内実は篠向城に限らずかなり心許ない。

### 1 文献史料にみる篠向城下

中世における城下の様相を伝える史料がほとんど皆無のなかで、津山藩森家が編纂した地誌「作陽誌」は、元禄初年の作西地域各村の状況を把握することができる有益な史料である。

まず篠向城についてみると、山路は5町30間、東は瑞景寺山に続き、北は三崎村と目木村、西北は台金屋村、西は大庭村と平松村、南は古見村、眺望はよい。創城は不詳で、高松合戦の後に城主となつた江原親次の病死により断絶した。親次とその一門、家臣の居宅が「城西辺」にあり、耕作地となつてゐる、とある。大庭村は「大篠崩」という篠向山から突き出た尾根を境に隣村の三崎村と隔たつてゐる。また山内に真言宗寺院、篠向山普門寺があり、本寺は江原氏の菩提寺金龍山江源寺（久米郡美咲町里）。開基は未詳、篠向城主の祈願所であったが、城が廃れた後に寺も衰退したとある。

「城西辺」にあたる大庭村についてみると、同村は津山（津山市山下）から5里20町、長さ3町余りある集落は古くは雲作往来の宿駅で、村高は635石4斗（田546石8斗、畑88石6斗）、戸数は67戸、人口は334人である。また、大庭村に接して大庭川（目木川）が流れ、久世川（旭川）へ合流しているとある。ちなみに大庭村の宿駅機能は寛永期（1624～43）頃に久世村へと移ったと考えられている（『久世町史』）。そして「作陽誌」に先行して執筆された「武家聞伝記」（岡山大学附属図書館池田家文庫）の記事からは、延宝期（1673～81）以前の村内に「町」と呼ばれる大規模な集落があつたことが知られる（表1）。

村内にある八幡宮は大庭・平松・三崎・台金屋・多田五カ村の氏神で、祭日は9月23日。境内は東西40間、南北50間、石鳥居は関長政の家臣作野氏が造立したものとある。

福祐山法光寺は法華宗寺院で、本寺は具足山妙覚寺（京都府）。天正2年（1572）に江原兵庫の室が建立し、当時の住侶は教覚院とある。境内は東西15間、南北14間。ただし、現存する寺記に、明応3年（1494）

に教林院日従の創建とし、そののち「江原兵庫親次老母」が惠照院日春（1586～1608在職）の代に寺内の「鬼子母神・十女神」を建立したとあり、年代感をやや異にする。また、江原氏家臣でのち三崎村に居住した金田氏が有力檀徒とされていることは興味深い（「当寺暦代并由緒」ほか）。

有経山妙蓮寺も法華宗寺院で、本寺は記載がない。慶長元年（1596）、本住房日永の創建とある。境内は東西15間、南北19間。梵鐘は「旦野氏」寄進のものとある。「旦野氏」は、近世初頭に「旦（旦）助右衛門」こと治作という老人の大庭村居住が知られるように、継続して同地の有力住民として存続

表1 大庭村の集落と軒数

集落名	軒数
町	74間（軒）
大日	12間（軒）
鯰	7間（軒）
合計	93間（軒）

していたことが窺われる（「中島本政覚書」など）。このほか、「大日寺跡」として、慶長年中に滅んだ真言宗寺院があったことが記されている。

## 2 切絵図にみる篠向城下

それではより具体的な大庭村の地勢について、明治中期の切絵図などを手がかりに図示したのが（図1）である。篠向山西麓の谷裾に「内構」の地名が、その前方を通過する街道沿いには「町頭」「屋敷」「○○屋敷」の小字を残す短冊型地割が残り、その中程で「高田道」が分岐して西方へと向かっている。また「内構」に対する外構的な町屋のありかたや「小門口」の地名から、小規模ながら武家屋敷や寺院、町屋からなる「惣構」があった可能性もある。この大庭と呼ばれる集落一帯がかつての「町」にあたるとみられ、現在も農家が旧街道に沿って並び、かつての街村的な雰囲気を伝えている。

大庭村の北部と南部には条里地割がみられるが、大庭集落一帯では確認できない。実際、集落北部を流れる目木川（大庭川）は、延宝元年（1673）や明治25年（1892）の大水害により流路が移動し、現在に至ったとされるように、古く一帯は氾濫原の様相を呈していたと見られる（『美作略史』、『久世町史』など）。その中程にはまさに「河原市場」や「教林防（坊）」「紫雲寺」の地名が残る。

切絵図のみの検証で不安は残るが、ここに他の戦国期城下町で指摘されているような、「惣構の中に武士と直属商工業者が居住し、その外に（中略）市場が存在する」「二元的な構造」が見いだされるのは特に注目されるところである（小島道裕『戦国・織豊期の都市と地域』2005）。

## 3 篠向城下の「町」の成立と推移

こうした篠向城下の「町」はいつ、どのように成立し、推移したのだろうか。

篠向城そのものの歴史的推移についてはかつて述べたことがあるが、南北朝期から天正期（1573～92）のなかばまではほぼ戦時の籠城・普請・在番の記事に限られ、天正10年（1582）からまもなく国人江原氏が同城を居城に定めたとされる以降の時期が、政情の安定も含め、初めて特定の国人勢力による地域の求心点となりえた可能性を窺わせている（『篠向城跡』2007）。

さて元来、いわゆる出雲往来は目木村から久世村へ直線的に通じ、森忠政の街道整備によって大庭村を経由するようになったとの伝承をもとにした見解がある（『久世町史』など）。確かに郡衙想定地や古代寺院跡の立地などから鑑みて、後述するように津山藩森家の変更とされる点以外は一応肯定できる。そのうえで少なくとも近世以降の出雲往来が山坂や氾濫原をわざわざ通過し大庭を経由することになっているのは、変遷がおそらくその間の政治的な理由によるからではと思い至る。

美作国における近世宿駅制度は、既に宇喜多秀家の時代に存在が窺われ（「作陽誌」久米郡南分県邑部稻岡庄南庄村条）、当然それは秀家が天正末年から慶長初年に行なったとされる岡山城の修築、城下町の整備と山陽道の誘致に連動したものであったろう。大庭の地は岡山から伯耆国への通路上にあり、あわせて宇喜多氏一門とされる江原氏の拠点である。つまり大庭の宿駅機能は領国の要衝として宇喜多氏が設定したもので、近世の出雲往来が大庭の町並のなかばから西方へ分岐するといった道筋の不自然さも、こうした事情に起因すると考えれば、より合理的で分かりやすい。

以上から、篠向城下の整備は、江原氏が同城を拠ったとされる天正期なかばを画期に、所領における政治・経済の中心地化を志向して、家臣や直属商工業者の集住、寺院の建立などをもって進められ、程なく宇喜多氏から宿駅に設定されたとの見通しを立ててみたい。ただし、ほぼ同時期に豊臣政権の「山城停止令」が領国内で実施されたらしいことから、史料的には慶長3年（1598）の親次の病死により

廢城（「作陽誌」）とあるものの、実質いつまで山上の城郭が存続したか定かではない。親次の遺児とされる「浮田内記」はまもなく秀家の近習として三千石を知行しているように、篠向廃城の後は宇喜多氏の政策に基づき岡山城下へ本拠を置いたものと思われる（「宇喜多家分限帳」など）。

なお、同5年の宇喜多氏の没落のちまもなく、内記とその母である宇喜多秀家の姉の「作州笛吹」滞在が知られているが、これは金田氏や旦氏など帰農したゆかりの人々の支援で旧城下にあったということだろう（「吉備温故秘録」など）。その後も「町」は宿駅としてしばらく存続するものの、森忠政の美作国入部を経たのち宿駅機能を失い、次第に農村集落へと変容していったと考えられる。

#### おわりに

わずかな史料からではあるが、篠向城下の「町」の形成とその推移について考えてみた。

江原氏が宇喜多氏の一門という点からやや特別に属するかも知れないが、例えば東美作の倉敷城（美作市林野）でも天正末から文禄期にかけて、在番を命じられた宇喜多家の重臣によって城下町整備が促された形跡を認めることができる（『美作町史』通史編）。篠向城のそれも、宇喜多氏政権の領国政策の一端や、政策に対する国人層の動向などを窺うる一事例として興味深いものがある。

現地踏査など課題は多いが、本稿が少しでも今後の参考となれば幸いである。

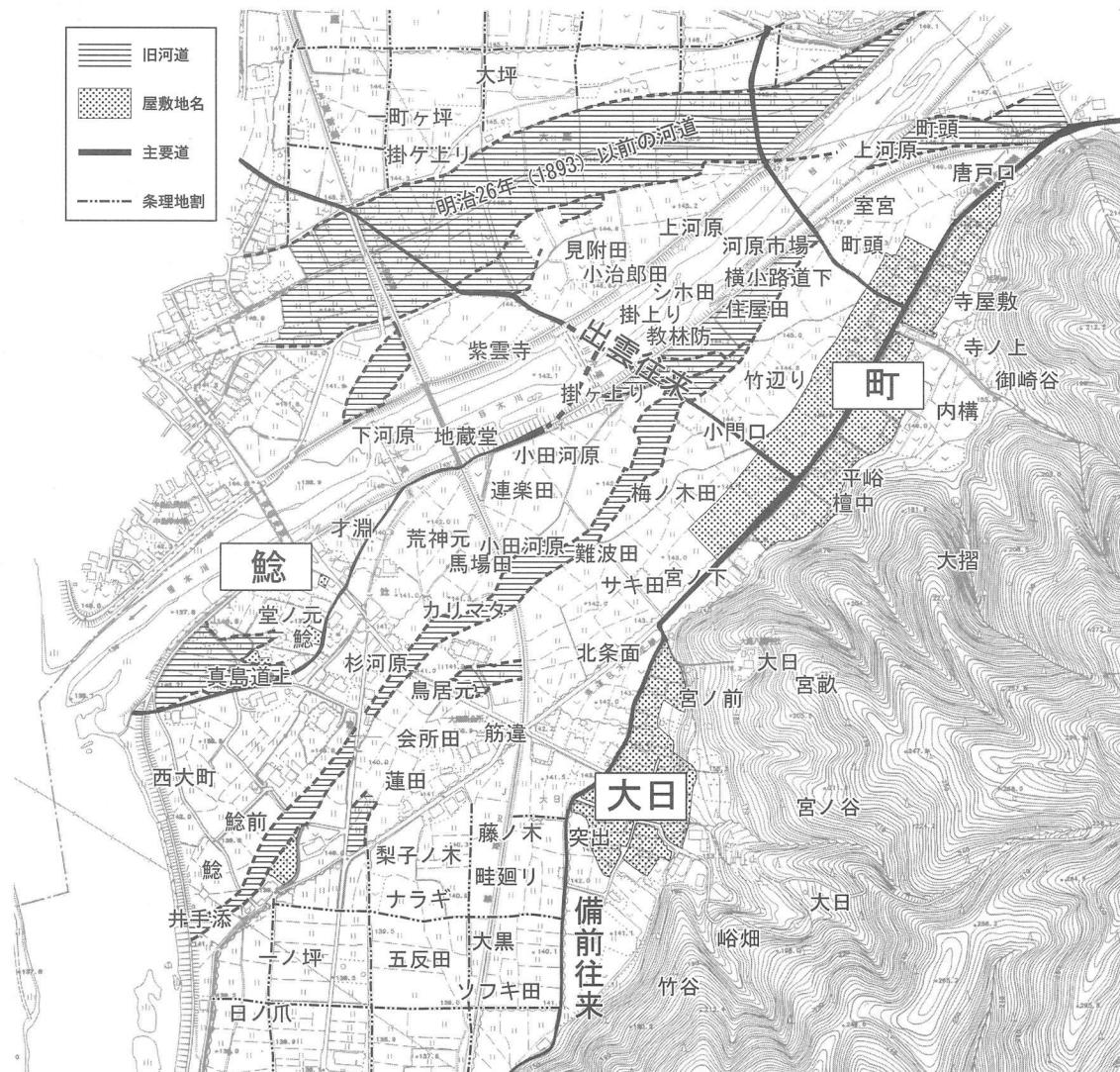


図1 真庭市大庭の小字と街道・旧河道（市資料と現地踏査により作製）